

## はじめに

今でこそパソコンはその地位を確立していますが、1980年代においては、パソコンに興味がある人は奇異な目で見られ、オタク扱いされました。現代では、ユーチューバー、プロゲーマー、データサイエンティストという職業が確立していますが、1980年代はまだまだアイドル全盛期であり、憧れの職業はテレビ業界ではなかったかと記憶しています。その時代、私は小学校、中学校、高校時代を過ごしました。

テレビというのは、一方的で強く影響を受けやすいメディアです。有名なタレントさんの発言が市民に大きな影響を与えます。テレビで紹介された店が流行り、テレビで紹介された食べ物も流行ります。そういう意味では、大衆はテレビに大きく動かされていたといえますし、また、場合によっては大衆を動かすことができる魅力のある職業であったかもしれません。

人は環境に合わせてるよりも、環境が変わってもらった方が楽でしょうから、パワーバランスの強い方につきたいと思うのは自然なことだと思います。そして現在の自分の地位を守り、

パワーバランスが変わらないようにしようとする心理も自然なことです。地球の周りを天体が回っていると信じた時代に、地球が太陽の周りをまわっている地動説をと考えたコペルニクスが見下され、揶揄されたように。

1980年代オタクとして奇異に見られたパソコン少年たちは、現代において華々しく活躍しているはずなのですが、それもあまり日本ではマスメディアに取り上げられません。注目されるのは技術者ではなく、たいていは経営者です。理由を想像するに、日本の大衆は技術者の成功が面白くないのでしょう。出る杭は打たれる、のことわざにあるように、飛びぬけた人のことを嫌う習性があるようです。一方、アメリカでは、独創性による成功を大いにたたえます。夢を追いかけて、ヨーロッパからアメリカに渡って来た人たちの開拓意識がそうさせているのだと思います。

日本は四方を海に囲まれ、地面の上での国境を意識する必要のない特異な地形をしています。イングランドも同じでしょうか。昔から長きにわたり続く家柄も多いです。

そういった家よりも飛び抜け目立つことは、生きることに強く影響したのだと思います。江

戸時代は250年続きましたが、日本において産業革命ほどの発展はありませんでした。た  
たえられたのは文化・芸術であって、科学ではなかったのです。

先ほど、コペルニクスを話題に出しましたが、見下され、揶揄された理由はもう1つあり  
ます。それは、宗教です。宗教の考え方は、神に基づきます。その神の考えを覆そうとする  
輩は、不屈き者というわけです。神を絶対とするから、事実・現実を曲げてでも科学的仮説  
を否定しようとするわけです。あくまでも自分の地位を守ろうとするのですね。

人の心理というのは、そんなものです。しかし科学者たちは、常識とされるさまざま  
とに疑問を持ち、自分たちがおかしいと思ったことを突き詰め、その仮説を実証してしま  
した。もちろん、すべての科学者が正しい仮説に思い至ったわけではなく、自分の仮説を正し  
いことのように捻じ曲げ立証した人もいたことでしょう。

それでも科学的に正しいとされた仮説は最先端技術の地盤となり、世の中に便利なものを  
数多く生み出してきました。

私は現在、子どもたちにプログラミングを教えています。先日、残念なことに保護者の方

からプログラミング教育に対する否定的な発言を聞きました。プログラミングを教えるにあたってゲームの作成を題材にしているのですが、それが面白くないらしく、世の中に役に立つものを作ってくれればいいのに、とおっしゃるのです。

今でこそ、スマートフォンを当たり前のように使っているその方も、それがプログラミングされた結果の塊であり、それが形として世に出るまでに、何十年という月日がかかっていることに、まったく気付いていないようなのです。頭のいい奴は嫌いだ、などと言う方もいらっしやいますが、この世にある便利なものはすべて頭のいい人たちが形にして作り上げたものです。頭のいい奴は嫌いだとおっしゃるような方には、この世にある便利なすべてのものを使ってほしくない、とさえ私は正直思っています。

消費者ニーズに応えるべきだとはよく言われたものですが、消費者が一方的に消費するだけであれば、消費者はわがままになるばかりです。消費者も会社で働けば、モノやサービスの作り手の一員です。一昔前であれば、言われた通りに言われたことをこなす人材がよしと

されてきましたが、現在に至っては、そんなことは当然のことで、お客様を集めるアイデアや新しいサービスを提供する発想を持てる人でなければとても人材とは呼べなくなりました。これはもう単なる仕事の仕方の話ではなく、生き方の考え方であり、どのように生きるとその人にとって幸せかという話になります。

この本を手にとって読んでくださる方は、自らの人生を自らの手によって切り拓き、努力の報われる社会を継続して作り続けようとしてくれる人だと信じています。決して、自分が面白くないからと言って人を邪魔するような、憎まれっ子が世に憚るような社会をよしとするような人ではないと信じています。